

# 今岡十一郎の活動を通して観る日本・ハンガリー外交関係の変遷

梅村 裕子

はじめに

## 一 今岡十一郎の足跡

- 一―一 渡航のきっかけとハンガリーでの活動
- 一―二 帰国から第二次世界大戦終結までの活動
- 一―三 戦後の活動

## 二 オーストリア・ハンガリー君主国時代の両国関係

- 二―一 前史と第一次世界大戦
- 二―二 パリ講和と国境査定問題
- 三 ふたつの大戦間期における関係

## 三―一 通商条約取極め

## 三―二 「私的領事」今岡

## 三―三 文化協定締結とその後の営み

## 三―四 ハンガリーの三国同盟参加

## 四 冷戦の両側で

四―一 一九五六年ハンガリー動乱の影響と国交回復

四―二 戦後の両国関係と今岡

おわりに

## はじめに

冷戦終結を経て日本と東欧諸国との関係は一変した。日本・ハンガリー関係も一九九〇年代からはそれまでの制限された関係から解き放たれ、現在は特に外交的懸案事項もなく政治、経済、文化の領域で良好な交流が発展している。一方、日本・ハンガリー関係史の研究は、史料の扱いが自由になってから日が浅いため比較的新しいテーマである。まだ包括的なモノグラフも書かれていない。両国関係において戦前からパイオニア的な役割を果たしたのが今岡十一郎である。筆者は彼の業績、主に著作等についていくつかの論考をハンガリーで発表してきたが、日本ではあまり知られていない。両国間の最初の架け橋として活躍した人物を紹介するとともに、今回は新しい史料や研究も駆使し、今岡の活動を辿ることで垣間見える両国の外交史に焦点をしばり、特徴とその変遷を描き検証する。

二〇世紀の日本・ハンガリー関係は世界史の流れで大きく翻弄され様相はその都度変化した。今岡は日本において一時外務省の嘱託職員であったが、活動の多くは民間人として外交の現場でも役割を果たしてきた。彼の活動を通して日本・ハンガリー外交関係の特徴的な断面に光を当てる。両国関係のパイオニアとなった人物の活動を座標軸にして、ヨーロッパの一国と日本の関係を鳥瞰図的な角度から考察する。

## 一 今岡十一郎の足跡<sup>②</sup>

### 一―一 渡航のきっかけとハンガリーでの活動

今岡十一郎（一八八八―一九七三）は一八八八年四月二一日島根県松江市に生まれた。幼少の頃家は貧しく小学校を卒業すると上の学校へ行きたい気持ちがあったが、学費の余裕はなかった。父富之助が瑠瑠加工業を営んでおり、今岡も学費を捻出すべくこの瑠瑠加工の見習いで働いた。松江は日本有数の瑠瑠の産地で、近辺ではそういった工芸が盛んだったのだ。この石を削って加工する技術の習得は、彼に継続的な仕事や忍耐強さを植え付けたようである<sup>③</sup>。若い時に培われたこういう性格は後の活動にプラスとなった。その後普通より少し遅れて松江高等学校（現・松江北高校）に進学し一九一〇年に卒業した。そしてこの年東京外国語学校（現・東京外国語大学）ドイツ語科に入学、一九一四年に卒業しその後引き続き専科でフランス語を学んでいる。この頃今岡の恩師、山口小太郎教授は来日した旧知のハンガリー民俗学者バラートシ・パログ・ベネデク<sup>④</sup>を今岡に紹介する。北海道やサハリンに住むアイヌ民族を研究しようというパログにドイツ語の通訳兼アシスタントとして同行するというものであった。これが今岡のハンガリーとの最初の関わりである。半年間程パログの北方研究に付き合い親交を深めた。

第一次大戦で今岡は通訳官として軍務に就き、退営した後は東京大学経済学部の図書館で司書として日々の糧を得ていた。海外へ留学する希望を持っていて費用の準備にも努めていたようだ。大戦が終結し渡航の機会を窺っていた頃、一九二一年再びパログが来日した。目的のひとつは自身が熱を入れているツラニズムという運動を日本で

も広めるということであった。<sup>5</sup>ハンガリー人と日本人を兄弟民族と結び付ける思想に今岡は惹き込まれ賛同者となった。数ヶ月の間にブログの主張を講演で訳し、記事を翻訳して雑誌にも載せている。<sup>6</sup>また「ツラン同盟」なる団体を設立しているが、これに関してはいくつかの新聞記事を除いて実際の活動をしたというところまでは至らなかった。

留学を実現すべく一九二二年ブログと共にアメリカを経てヨーロッパへ到着した。立ち寄ったドイツは戦争の傷跡もひどく足早に引き上げ、ブログの祖国ハンガリーへ降り立った。知り合いのついでで医科大学のイレーイ通りにある学生寮に部屋を借りる。一二畳程もある部屋と街中の利便性は快適な生活をもたらし、帰国するまでの約九年間をずっとここで過ごした。ハンガリー語は当初から集中的に取り組んだようで、いつも和独・独和、独洪・洪独の辞書を持ち歩いて言葉の習得に励んだ。

間もなく求められるまま新聞紙上に日本についての記事執筆を始める。この頃欧米ではアメリカにおける排日運動に起因する黄禍論が盛んで今岡はそれについて意見されたり見解を求められたりで、同地に滞在する日本人としては弁解を余儀なくされた。<sup>8</sup>同時にハンガリー社会における日本に対する並ならぬ興味関心を感じたものの、その情報は偏ったり歪んだり、彼自身も記事や講演でそういう面を補いたいと思っただ。<sup>9</sup>

記事を書き始めたのは一九二四年頃からで、帰国するまでの五、六年間に掲載された数は少なくとも約一五〇本にのぼる。<sup>10</sup>掲載紙は日刊紙、雑誌と多岐にわたった。特に『マジナルシャープ』（ハンガリーとハンガリー人）紙の日曜版には頻繁に書いた。テーマは大抵日本を紹介するもので、当時の欧州にあったエキゾチズムへの関心を惹くようなテーマが多い。すなわち茶の湯、芸者、正月行事、雑祭りや五月の節句、生活習慣、食習慣、その内テーマは日本の教育や文学、演劇、美術の紹介にまで広がった。今岡の時代は古い日本の習慣がまだ強く残っていたし、

その記述は時に強調されていて今の日本人には郷愁を感じさせる。並行してほとんど同数の講演も行っている。當時の講演ポスターや招待状によると全国津々浦々の都市や村に呼ばれて出かけ、幻燈写真を使って講演した。テーマは記事と同様広い範囲に渡ったが、地方の村などでは一般的な日本紹介をした。テレビもなく、一般の人々の行き来もない時代、日本に関心の高いハンガリー社会で日本人がハンガリー語で自国を語るのだから人気が出たことは容易に推測される。実際にポスターには「混雑を避けるため講演は二回行います」と記してある。<sup>12</sup> またツラン協会の語学プログラムにおいては足掛け三年に渡り日本語を教えた。このような活発な活動は今岡に日々の糧をもたらした。滞在の最初は日本での貯蓄や仕送りを頼りにした。<sup>13</sup> その後は徐々に講演の謝礼や原稿料、語学教師、通訳者として生計を立てるようになった。<sup>14</sup>

掲載された記事・講演録を中心に一九二九年『ウーイ・ニッポン』（新日本）という題の書物を大手のアテネウム社から出版した。日本人の手による初のハンガリー語書籍である。注目を集め新聞雑誌の書評欄を賑わせた。少なくとも二〇篇の書評記事が掲載されたが、多くが今岡の文章の良さ面白さや挿絵・写真の美しさを賞賛している。<sup>15</sup>

こういった日本紹介活動の他、経済分野においても架け橋的役割を担っている。この頃日本・ハンガリー間の貿易はまだ取るに足らない量であった。経済分野の発展こそ二国間関係を継続的にすると思つた今岡は、手始めにウィーンの見本市に出品された日本産品をハンガリーへ持ち込むべく奔走した。これらの産品は翌年のブダペスト国際見本市で展示された。これがきっかけとなり年末には通商取極めが交わされ、翌年にはブダペスト国際見本市に日本が初参加した。

戦間期の日本・ハンガリー間は外交関係こそあったが公使館はまだなく、ウィーンの日本公使館がハンガリーを

管轄していた。ウィーンからブダペストへの客の訪問は頻繁にあり今岡は案内役を務めている。ハイライトだったのは一九三一年一月二七〜二九日にかけての高松宮のブダペスト訪問であり、今岡は準備段階からウィーンの本公使館と連繋を取り協力している。このように何かというと今岡が駆り出されていた。一九三〇年、帰国前に今岡は両国関係発展に尽くした功績として摂政ホルティより勲三等白十字章<sup>16</sup>を授かった。

講演や記事を通じて今岡の名は全国的に知られ、様々な催しや会合への招待を受けた。貴族達上流階層の集まる社交界、舞踏会にも招待客や幹事として名を連ねた<sup>17</sup>。政治家や著名人と懇意になる機会も豊富にあったと察せられる。ブダペストでのもうひとつの出会いの場は居住地から程近いカフェセントラルである。戦間期のブダペストはカフェ文化が大いに花開いていた。カフェによって独自の雰囲気があり、各々が競い合って文壇カフェ、ジャーナリストカフェなどに分かれ、朗読会や展示会があり、内装やメニューにも工夫が凝らされた。今岡が通ったセントラルは文芸誌『ニュガト』に関係する作家や文芸記者の出入りするカフェとして名を馳せたところだ。今岡が座る「いつもの席」があり、給士達は「日本の先生」と呼んでいた。作家や編集者との出会いには格好の場所であったろう。日課として通っていたことが次の返書からもわかる。「大体毎日午後一時から四時はセントラルにいます。この時間なら大抵お会い出来るでしょう。」<sup>18</sup>また、ハンガリーのな習慣は田舎に多く残っており、それらを今岡も好んで体験していた。地方の村から誘いがあつてよく出かけ、農村に残る古い風習や生活に接する機会にも恵まれていた。

戦間期、ハンガリーでは友好団体である日本協会が重要な役割を果たした。専門家の講演や訪問した日本人との交流など広く行事を展開したが今岡は有力メンバーの一人として活動した。一九一〇年に設立のツラン協会の活動も活発になる。協会の根本思想ツラン主義は戦間期の日洪関係の特徴付けるキーワードのひとつである。それによつ

て日本とハンガリーは親戚民族という考えが広まり、国の紹介や語学講座などが営まれた。今岡も日本語を教えた。<sup>18</sup>

## 一―二 帰国から第二次大戦終結までの活動

今岡は一九三一年末、久し振りに帰国する。十年近い外国暮らしはまだ珍しく新聞が今岡の帰国を報じている。彼の人気振りについて現地では花嫁の申込みが殺到したなどという記事もある。<sup>19</sup>ハンガリーで知己を得た、当時外務次官の有田八郎らの取り計らいもあり、今岡は外務省に囑託で仕事を得た。翌年、宮内省の女官だった山田富美子と結婚し家庭を持つ。

帰国した今岡は直ちにハンガリーについて発言や記事執筆を始めた。もともと日本におけるハンガリーの情報は多くない。第一次大戦後は新興独立国がむしる注目され、ハンガリーへの関心は低かった。文字通り馴染みのない遠い国だ。今岡はこれを何とか近づけ、自分がハンガリーで体験した親日感情を日本で広めようと試みた。留学した国が気に入る長い月日を過ごし、どこでも親切やもてなしを受けた。帰国したら今度は自分がハンガリーの代弁者たりたいと強く思っていたようだ。ある年の年賀状でも「日本人にヨーロッパで最も親愛なる国ハンガリーを心をこめて紹介したい」と綴った。<sup>20</sup>

帰国した一九三一年から一九四四年までに約一二冊の著書・訳書を出し、一〇〇本以上の記事を発表した。どんなハンガリーが描かれたのだろうか。内容によって概ね次の様に分類することが出来る。(1)ハンガリーの風習や習慣、特徴、(2)ハンガリー文学、(3)ハンガリーと周辺国の政治と外交、(4)ハンガリーのツラン主義、及びツラン民族

とされる人々についての記述、(5)語学関係書。

(1)に挙げた国の特徴を記述したものは実際の体験に基づいての描写で生き生きとしたリアリティーを備えている。田舎で見聞した習慣、例えば農家で行われる豚の屠殺・加工作业などは民俗風習を詳細に伝える地域研究資料ともなっている<sup>(21)</sup>。記事の中ではこの類が一番ハンガリーをそのまま記していて、現在でも貴重な情報を提供している。国民性として挙げたテンペラメントに富む、芸術家肌、お客好き、生活の楽しみをよく知っている、などは彼らの一面をよく表している。

もう一方情熱を傾けたのは(2)とした文学作品の紹介である。本邦でのハンガリー文学の紹介は多くない。今岡は文学全体の体系的紹介を試み、まず『ハンガリー民族詩』（一九四一）で時代を代表する作家の代表作を訳出した。続いて『ハンガリー文学史』（一九四四）で全体を概観するアンソロジーを書いた。これらは本邦初の試みである。特にペーターフィに重きを置き翻訳では一章分割している。その他アラニら古典の代表的な作家を取り上げた。もうひとつ注目すべきは、ハンガリー文学の金字塔、マダーチ・イムレ作『人間の悲劇』の訳（一九四三）である。同作品はキリスト教思想を根本に置き歴史上の出来事が時と空間を超えて現れる壮大なドラマである。何か国語にも訳され、ファウストなどと比肩される、ハンガリー文学を代表する一遍だ。

(3)に挙げた、当時の政治や外交、中欧の国際政治に関する問題は時局柄好んで雑誌のテーマになった。『欧州の新噴火口』（一九三三）という平凡社のシリーズで、欧州の戦後処理や民族問題について解説した。ハンガリーについては独立に一章を設け、第一次大戦後のパリ講和で被った領土喪失の悲劇やその後の領土復活問題を論じた。あわせてハンガリーと周辺民族の関係もまとめた<sup>(22)</sup>。

今岡がハンガリーを広めるためにも利用したのが(4)のツラン主義に関わる記述である。前述のようにこの思想は



戦前のハンガリーでは社会的な影響力を持つ運動であったが、学術的な裏づけという点では問題もありそれほど広まらなかった。しかし汎アジア主義の流れの中、大亜細亜協会においては影響力を持った時期があった。<sup>(23)</sup> 今岡は非常に多くの記事を発表し『ツラン民族運動とは何か』(一九三三)という冊子を出した。その論点を観ると、ハンガリー語と日本語は膠着語だから似ている点があるとか、ハンガリー人は日本人を兄弟と呼び親日的であるとかが主な主張で心情的な表現や印象という部分も多い。しかし数年間にわたり繰り返し書いたことで、プロパガンダ的な効果を持ったとも言える。『大亜細亜主義』に三〇回以上に渡って記事を書き、まとめて出版したのが『ツラン民族圏』(一九四二)である。当時ツラン民族に属するとされた多くの少数民族についてハンガリーからの情報に基づき紹介している。かれら少数民族の多くはその後もソ連の中で自由な研究が制限されていた地域の民族であるから、そういう意味でも希少価値のある情報だったと言える。

(5)に挙げた語学書は最も時の波を経て読み継がれたものだ。大学書林から一九四三年に『ハンガリー語四週間』が出版された。同書は戦後も長く国内で唯一のハンガリー語学習書として何度も再版された。ハンガリー文学に造詣の深かった今岡らしく詩や小説からの豊富な引用や諺の対訳でハンガリー文化のエッセンスを盛り込んだ。同年、語学書に併用すべく『洪牙利語小辞典(洪日・日洪)』も編纂した。これは少数言語の辞書として非常に早い時期の試みである。

一九三八年、日本とハンガリーは文化協定締結によって急速に接近する。この協定に関わって今岡は極めて活発に活動した。協定が批准された後開かれた連絡協議会の常任委員として役割を担った。同時に日洪文化協会が設立され会報『日洪文化』が発行された。今岡は会報の編集長として毎回記事を書いた。

欧州では戦争が始まり、ドイツを中に置いて間接的ながらも日本と軍事同盟国という関係になったのは一九四〇

年一月のことだった。調印式の様子は日刊紙の一面で取り上げられ、新同盟国ハンガリーを大きく報道した。同国をよく知る人物として今岡はインタビュウで引っ張りだことなった。今でも残るハンガリーのイメージはこの時の情報が影響していると見られる。これについては第三項で詳しく述べる。

### 一―三 戦後の活動

戦後、日本とハンガリーは冷戦の両側に分かれ国交は休止状態となる。関係団体も解散した。今岡はしばらくの間沈黙を強いられる。停滞状況に動きが起こったのは一九五六年のハンガリー動乱勃発である。世界を震撼させたこの事件が、今岡に再度注目される出番を与えた。民衆蜂起が起こってすぐ超党派の国会議員が中心となり日本ハンガリー救援会が設立される。今岡は当初からこの組織に理事として参加し熱心に活動した。救援会は二ヶ月程の間に相当の寄付を集め、十二月にはウイーンの難民施設や赤十字にそれを届けるべく派遣団を組んで赴いた。今岡は一員としてウイーンへ出かけ、ラーゲルを視察し旧知の知人らと再会した。この時ハンガリーの自治体などから訪問の招待状が来たが、ハンガリーへの入国は見合わせている。「私の人生は富士山とカルパチア山脈、ふたつの山を歩き来する旅となりそうです。また必ずハンガリーへ戻ってきます。」ハンガリーを去るときの書簡にこう記したが再訪がかなうことはなかった。

ウイーンから帰国後は招待した三人の亡命ハンガリー人と共に全国を講演して回った<sup>23</sup>。一九五八年には『ハンガリー革命』という書籍で共産主義下の人々の生活を描いた。

その後ハンガリー関係の表立った活動がほとんどなくなった今岡は専ら語学の研究に励んだ。ハンガリーと近い

関係にあるフィンランド語を習得し、本邦初のフィンランド語辞書を刊行した（一九六三）。一方戦前に訳したハンガリー文学も加筆して再び刊行した。『ハンガリー詩文学全集』（一九五六）『ツラン詩文学全集』（一九五八）という文学書と『ハンガリー文化史概要』（一九六九）と題した文化全体を概観する書籍である。並行してライフワークであるハンガリー語辞典の編纂に情熱を注いだ。一人で時間と労力を掛けた辞書の原稿は六〇年代に書き上げられていたが、採算上出版は困難を極める。結局自費出版に踏み切った。長く気管支炎を患っていて体調も悪く時間との闘いとなった。一九七三年八月三十一日、死の床にあった今岡の元に刷り上がったばかりの辞書が届けられた。二日後、出来上がった辞書を胸にライフワークの完成を見届けて今岡は帰らぬ人となった。<sup>26</sup>

『ハンガリー語辞典』は見出し語約五万五千、九一五頁の辞書で、出版後既に三〇年経つが未だにこれを超えるものは出ていない。自費出版の初版が残り少なくなった機会に遺族が尽力し二〇〇一年大学書林から再版された。七〇年代にこの水準の辞書というのは他の諸国語と比較するに時期としても早く、先進的取り組みだったと言えるだろう。金銭的な見返りや名誉を生前には受けることなく文字どおりハンガリー紹介に捧げた人生だった。没後勲三等瑞宝章を授けられた。

## 二 オーストリア・ハンガリー君主国時代の両国関係

### 二―一 前史と第一次世界大戦

日本とハンガリーの外交関係を観る上でまずはその始まりの部分について簡単に概観する。一九世紀後半、日本が大政奉還から明治時代へと移る一八六七年、ハンガリーはハプスブルグ家との間で和約を結び、オーストリア・ハンガリー二重君主国が成立した。これはハンガリーにとっては政治的な成果であり晴れてオーストリアとハンガリーは対等な関係になったのである。外務と防衛を共同で営みオーストリア皇帝とハンガリー王を共通君主としてフランツ・ヨーゼフが君臨した。

日本との外交は一八六九年、イギリスの仲介もあり君主国の軍艦が日本へ来航し、修好条約を結んでいる。二重君主国は広大な領地を有する欧州列強のひとつであり、この時代日本の外交課題となった不平等条約を最後に結んだのがオーストリア・ハンガリーであった。公使館の設立を経て、明治時代の日本の歩みに決定的な影響を与えた、かの岩倉欧米使節団が一八七二年にウィーンを訪れ、当時オーストリア・ハンガリー帝国の共通外相であったハンガリー人のアンドラーシ伯に会っている。この時同国は列強のひとつであり、日本側はアンドラーシ外務大臣に不平等条約の改正を申し入れるもまだ相手にされず、逆に日本国内での自国民の旅行の自由を求められる始末だった。<sup>(27)</sup>この時期の両国関係は二重君主国の時代であるから外交をオーストリアとハンガリーを分けることは困難である。

その後間もなくバリやウィーンの万博で日本が紹介されて一大ブームが起き、日本流行の波はハンガリーへも波及する。日露大戦で日本が勝利したことはロシアと敵対する国、ハンガリーでは大いに歓迎され、日本は大国として認識された。東郷元帥や乃木將軍の名前は当時広く浸透している。ハンガリーでは自民族の起源が東方ということもあって、東への調査探検が盛んに行われ、早くは一八七〇年代から既にいくつかの調査団が我が国を訪れており、彼らの手による日本紹介の詳しい書物が何冊も出版されている。中には伊藤博文や大隈重信に会ってその印象

を記しているヴァイ伯や、アイヌ地方へ出かけて民俗学の資料を集めた学者バログなどが目立っている。<sup>(28)</sup>

一方、日本側からのアプローチとしては一八八〇年代から九〇年代にかけて書かれた柴四郎の有名な政治小説『佳人の奇遇』で一八四八年のハンガリーの革命・自由戦争が詳しく書かれていた。徳富蘇峰もハンガリーを訪れて『国民之友』に何度かハンガリーの様子を書き、豊かに文化が開く様子を称えている。その他森鷗外がハンガリー作家モルナールをドイツ語から訳していたり、東洋学者の白鳥庫吉は一九〇二年に半年ほどハンガリーに滞在していたことがあり、短い文章を残している。この時代の相互認識ということを観ると、日本におけるハンガリーは、まだ偶然の要素や旅行した印象記という、いわば点というレベルを超えないがハンガリーでの日本はより体系的、専門的な描写が行われていた。

第一次大戦で両国は偶然の不運から敵対国となり、たまたま上海沖に停泊していたオーストリア・ハンガリーの軍艦とチンタオに上陸した日本軍との間で戦鬪が交えられた。この軍艦は結局自沈し、乗組員は姫路の戦争捕虜収容所へ送られている。この中には五六人のハンガリー人が含まれていた。<sup>(29)</sup> もうひとつの接点はやはり第一次大戦の末期、シベリア出兵した日本軍の将校とソヴィエトの戦争捕虜だったハンガリー人兵士がシベリアで出会って友好関係を築き、これがきっかけになって一九二〇年代にハンガリーでハンガリー日本協会という友好団体が作られている。<sup>(30)</sup> ちなみに今岡はこの大戦に東京外国語学校卒業生ということで通訳として従軍していた。

## 二―二 パリ講和と国境査定問題

本項ではパリ講和と国境査定問題について取り上げる。この事案について今岡は直接的には関わっていないが、

彼のところに送られた膨大といえる量のハンガリー人からの書簡の中にこの問題が非常に頻繁に出てくる。そこには日本に対するハンガリー人らの期待や外交上の認識を表すものが多く見出せる。なぜそのような認識を持たれるようになったのか。外交文書を調査してみるとそれを裏付ける史実のあったことがわかってきた。

第一次世界大戦が終結し、パリのベルサイユ宮殿で和平交渉が行われた。ハプスブルグ君主国は敗戦で瓦解しいくつもの新しい国ができた。民族主義の勃興もあり民族単位で独立するためのプロパガンダ合戦、水面下での駆け引き、これらが奏効し新しくできた国がチェコスロヴァキア、ルーマニア、ユーゴスラビアなどの新興国家だ。日本の一般的な歴史記述では、ハンガリーがこの時ハプスブルグの支配から抜け出たことで新しい独立国になったことを強調する書き方をされることがある。しかしハンガリーは既に二重君主国としてオーストリアと対等の関係にあった。また議会の独立はハプスブルグ統治下でもずっと保っており、むしろハンガリーは不条理に領土を割譲された敗戦処理で深刻な悲劇を被ったのである。千年にわたって豊かな歴史を育んできた領土の実に三分の二、そしてハンガリー人の三分の一が周辺国へ組み入れられ彼らは突然外国に少数民族として生きることを強いられた。

ハプスブルグ家が帝国の統治政策として採った「民族を互いに対立させて支配する」やり方が結局このような帝国瓦解という形で終結したことは歴史の皮肉であろうか。苛酷な戦後処理のショックからハンガリー国民は抜け出る事ができずにいた。

新しい領土を裁定したトリアノン条約が発効した一九二〇年六月四日、ハンガリー全土の鐘が一時間に渡って鳴り響いてその大地を揺るがせ、人々は深い喪に沈んだ。この大戦での協商国、すなわちイギリス、フランスが中心となってハンガリーを貶める決定を下したことに国民は呆然となり、その孤立感はその社会の全体を重い雲のように覆っていたのである。

このような訳で、戦後再び王国として再出発したハンガリーであるが、領土復活というのは国民の悲願であり、政治・外交上の課題であった。臥薪嘗胆という勢いで領土復活運動が国民的に広く起きていた。

日本はといえば戦勝国としてパリ和平でハンガリー関係の条約にも署名している。日本代表团がこの領土裁定についてどれほど認識を持っていたかははっきりしないが、あまり高い関心を払ってはいそうにはない。このような大規模な国際会議は初めてで、代表団の委員さえ急遽集めたような有様だった。チンタオの権益など自分達の事以外は興味もなかったようで「沈黙の代表团」などと揶揄されていた事は知られている。全権の一人として会議に出席した牧野伸顕は後の回想録でこの国境裁定の場面を取り上げている。ハンガリーからトランシルヴァニア全体を獲得したルーマニア代表のブラティアヌが議案についての不満を述べたことに触れ、会議を仕切っていたフランス代表クレマンソーの一喝で「ブラティアヌは」泣き寝入りになって沈黙してしまった。(中略) 同情に堪えない」と記している。<sup>31)</sup>

こういった国境線の問題はどちらの側から見るとかというところで随分と違った見解になるものだ。当時の牧野にとってハンガリーへもルーマニアへも特別に思い入れがあった訳ではないだろうが、これほど広い領土を獲得したルーマニアに対して「同情に堪えない」とは、当代一級の政治家にしては随分ルーマニア寄りの意見を述べたものである。戦争前後には水面下で大変なプロパガンダ合戦の行われた時の事、何をかを示唆している。牧野は大戦前ウィーンで日本大使を務めていて、チェコやスロヴァキアの独立に役割を果たしたマサリクやベネシュと懇意にしていたようで、そういったことの影響も察することができる。

一方、ハンガリーでは日本に対して親近感を抱いており、自民族のルーツを探すツラン主義運動でも日本はいつもパートナーとして注目されていた。今岡が滞在した時代のハンガリーは敗戦処理直後で、領土問題は大きな懸案

事項だったし、「裏切られた」西側諸国ではなく東洋に何か活路を見出そうとしていた時期であった。そこへ今岡がやって来たわけで、様々な機会に彼らの思いに接することができたし、受け止めようとしていた。それを示すのは今岡の年賀状とハンガリー人からの返答である。膨大な今岡への書簡の中で抜きん出て頻繁なテーマだったのがこの領土問題だ。私信であり皆それぞれに多様な書き方をしているが、通奏低音のように響いているのは失われた領土とその復活への望みである。それは政治家から市井の人々まで多岐に及んでいた。具体的に観てみる。

滞在中この問題を見聞きし、雰囲気をよく感じ取っていた今岡は年賀状でさりげなくこれに触れている。

「大晦日は分断された（ハンガリー）国境のどこか近くで過ごすつもりです。（中略）国境からは日の出と、失われたカルパト山脈が臨めるそうです。私にとつては両方共親しみを感じるもので、思いを馳せる時、喜びと悲しみが入り交じります。」<sup>23)</sup>

翌年になると次のようにはつきりとこの問題に同情を表している。

「ハンガリーが欧州地図上で分割されたままになっている限り、世の倫理や正義の優越、文明の勝利を謳い上げる事は出来ないと思えます。切り刻まれたハンガリーの地図を見る度に、歪んだミロのビーナスが目に見えます。」<sup>24)</sup>

懸案の領土問題を日本人にこう記述されればハンガリー人達は喜んで返信をしたためるだろう。これに呼応し大勢の人達が、時には自分の体験を語り、時には将来への希望を記し、日本の支持を求めている。この時期領土問題が公の政策だっただけでなくエリート層や一般住民の広い範囲でいかに支持され、その悲劇的状況がどれほど強く人々の日常に影響していたかということが文面から読み取れる。

文化大臣クレベルスベルグは今岡のハンガリーへの愛着を今後も願ひ「この不運なハンガリー国民」という表



現で気持ちを表した。<sup>(34)</sup> 作家のモーラ・フェレンツも類似の言葉で想いを綴った。

「我々の様な、友人に恵まれない孤かな民族に好意を持ち、その良い点を認め欠点を受け入れてくれる人が遠い日本に居るのだと考えるのは嬉しいことです。」<sup>(35)</sup>

今岡と頻繁に手紙を交わしたサパーリ伯は、孤立したハンガリーの状況を次の言葉で表した。

「我が国と国民を知って好意をもたれたよう希望を感じます。というのは今ほど少しでも多く外国の人々が我が国を知り好意を持たれることを必要としている時はないでしょう。」<sup>(36)</sup>

具体的な体験としてノグラード・ホント県の知事は自分達の街（バラツシヤジャルマト市）の様子について述べている。ここは街の境界がそのままチェコスロヴァキアとの国境線となり、文字通り人や物の流れが遮断されている。

「以前の生き生きとして華やかな頃に較べると今や国境沿いの死にかけた取り柄のない街になってしまいました。我々に対するこのような国際的悪行を決して許す事は出来ません。」<sup>(37)</sup>

あるいは悲しみと絶望を切々と訴える次のような書簡。

「国土分断の無残な結果を日々感じています。私達は夫婦共に祖国なしになりました。なぜなら妻は上ハンガリー（現スロヴァキア）、私はトランシルヴァニア（現ルーマニア）出身だからです。月日が経つ毎に悲しみは深まり希望は薄らぎます。正義は必ず勝つと信じてはいますが、それは私達そして年老いた両親達が生きていく内に果たして実現するでしょうか。」<sup>(38)</sup>

これらに続いて書簡の文脈に連なっているのは領土回復の目的を日本が支持し協力を求めるものであり、これが相頻繁に出てくるので驚かされる。今岡は公人の立場にはなく、政治状況から言っても日本が何か実効ある役割を外交上果たす可能性がどれほどあっただろうか。孤立感の深かったハンガリーの人々は身近な日本人を通して「大

国」日本に何かを期待したかったようだ。貴族院議長ヴラシツチ男爵は、期待を語る。

「近い将来再会する日、その時までにあなたが知識を広めた成果により、この分断された祖国について日本でも多くの理解者を得ていることを願っています<sup>39</sup>。」

一九世紀のハンガリー改革運動を推進し、国の発展に大きく貢献したハンガリー史上の偉人の一人であるセーチェーニ・イシュトヴァーンの孫であるセーチェーニ・バーリント伯と今岡は交流を持っていた。彼もまたこのテーマに言及している。

「今岡さんが計画されている著書において、トリアノン条約でハンガリーが被ったこれ以上ない程の不条理と残酷について広く知らしめられ、それがこの不幸な運命を変えるべく手助けになることでしよう<sup>40</sup>。」

と今岡の日本での活動にエールを送る。知日派の医者で日本についての著書もあるボゾーキはやはり戦後の講和を批判し、来るべき新たな領土裁定の日には「権威ある席に位置し、決定に影響力を持つ大日本」がハンガリーの立場を理解してくれるに違いないと望みを綴った<sup>41</sup>。ここにも国際政治上で影響を持てるような日本へのイメージが読み取れる。文化省の官僚で日本についての著作のあるナジ・イヴァーンは子供の頃に聞いた日露戦争の思い出を披露する。

「あれは六、七歳の頃でした。東郷元帥がロシア艦隊を破り、日本兵達が万歳を叫んでポートアルトゥールの要塞に登っていました。私達はこの地で遠くアジアの『親戚』が勝利したことを喜んだものです。今度は我々がもう一度ボジョニ、カッシャ、コロジュヴァール、アラド、サバトカ<sup>42</sup>の塔にハンガリー国旗を掲げ、それを喜んで日本の若い人達が拍手を送るといふ日が来ます様に祈りたいと思います<sup>43</sup>。」

これらは書簡のほんの一部であるが、類似する手紙の多さ、そしてそれらがハンガリー社会の広い分野の指導者層

から送られてきていることを観ると、戦間期の同国にあった領土回復運動がいかにはっきりとした国民の心情であつたかが判るし、日本に対して期待を持っている様子も伝わってくる。

こういった認識をハンガリーの人々が持つにはどのような経緯があつたのだろうか。史料に当たると、パリ講和ではそれほど役目を果たさなかつた日本代表団であるが、その後の国境策定では委員として参加し、比較的中立的な態度を取り、ハンガリー側に有利な意見を述べている。

ハンガリーの公文書館と東京の外交史料館には当時の国境画定委員会の報告書が残っていて、主に武官からなる日本人の委員がどんな認識でこの業務に当たっていたかを垣間見ることができるといえる。国境画定委員会の現地調査は一九二一年から一九二二年にかけてかなりの回数で行われている。というのもこの時期は国境周辺でまだ線引きがはっきり定められていなかった地域があちこちにあつたのだ。委員はフランス、イタリア、英国、日本に当事者のハンガリーと該当する場所によつてチェコスロヴァキア、あるいはルーマニアの委員を加えた六カ国からの参加である。

ここで具体的な例を観てみる。一九二二年三月はチェコスロヴァキアとの国境地帯シャルゴータルヤン市から北へ広がる地域の村や駅の帰属についてである。この時の委員が書いた報告によりシモシュケーと近くの石炭鉱山はハンガリーに留まることが決まつた。またその隣村シヨモシュウーイファルと鉄道駅については委員の意見が割れた。日本と英国の委員がハンガリーへの帰属に賛成し、フランスとイタリアが反対したが、結局これはハンガリーに留まつた。ハンガリー人の将校が残した報告書によると、この頃はまだハンガリーも様々な望みを断ち切れず、北部の都市カッシャ（コシツエ）の保持を期待していたようだがそれは適わなかつた。報告書では「フランスとイタリアの委員があからさまに反ハンガリーの態度を取るのに比べ、イギリスの委員は中立であるうとしている。日

本人の委員は少し受身であるが、とりあえず英国の委員の意見に同調しているのでこちらとしては助かる」と述べている。<sup>43</sup>この時の日本委員は陸軍少佐の安藤利吉で、外交史料館に残る日誌によると、この国境視察のためブダペストに滞在中、首相のベトレン・イシュトヴァーンから晩餐会に招待されている。その席で今度はいつ来るのかと聞かれ、まだわからないと答えるも、ベトレン首相は是非再訪し、今の国境の変化がどんな風かよく見てほしい、と彼に乞うている。その後安藤は日誌の中で「予、自ラ省ミテ其画定シツツアル国境線ノ永久性ヲ信ズルモノニアラズ。又、匈民族ガ如何ニ新国境ニ対シ不満ヲ抱懷シ其恢復修正ヲ念トシツツアルヤノ一端ヲ窺ウ得ベシ」とハンガリーに同情的な感想を記している。続けてこのように幾何学的に国境線が引かれ、民族自決とは遠く将来に禍根を残すとも書いている。<sup>44</sup>

またルーマニア国境を視察した陸軍少佐の佐野光信は策定に関して委員の間では「大々異議アリシモ佛国委員ムニエ少将、巧且悪辣ナル宣伝ニ依リ多数決ヲ以テ決定シタルモノナリ」とフランス委員があまりにルーマニア一辺倒で話しにならない、著しく公平を欠き、まことに遺憾である、とまで記している。この時議論になったのは南部ルーマニアとの国境にある村ボルガーニである。佐野はハンガリーに帰属すべしと考えたが、フランスの熱烈な意見によつて結局委員同士では意見が割れ、ルーマニアに割譲された。現在は隣村と合併されてオーベバ（ベバ・ベケ）というルーマニアの村になりこのボルガーニという名前も消えてしまっている。近くのナジラク、キシユベレグも同様の運命となった。佐野はこれらの新しい国境は自然を分断してしまい、今度の新しい国境は経済と交通を破壊し、街と村を離し平地と山を離し工業は荒廃する、とその重大な影響について指摘している。特にアラド、ナジヴァーラド、サトマルネーメトの三大市街地は被害甚大であり、家族・親戚関係をバラバラにし行き来も墓参りも難しくする不自然なものである、と領土割譲の本質的な不条理を批判していた。<sup>45</sup>

しかしこの時既に大半の国境は決まっております、新しい国境線画定の全体からみれば取るに足らない小さな村や施設についてだけの策定であつて、中立的な立場の意見も事を抜本的に変えられるわけではなかつた。領土を大きく切り取る重要部分について、もはやパリ条約の決定を覆す可能性は残されていなかった。ともかく日本委員の中立的な態度をハンガリーは評価していただろうし、今岡に託された書簡に現れたような日本に対する信頼の基になる関係が存在していた。彼らは将来、領土回復が実現するとすればその時こそ日本の支援を期待していたわけだ。

そして一九三〇年代後半になつて欧州の政治は大きく動き、一時的ではあつたがハンガリーには領土の一部が返還された。二度のウィーン裁定である。この時、ハンガリーと日本は文化協定を結んで近しい関係になつていた。そして裁定について折衝が続く中、ハンガリーは日本の駐ドイツ大使、大島浩に対してこの領土問題を支援しヒトラーに対し仲介を頼むなど働きかけている。エピソードとしても興味深い。この後ハンガリーは実際にドイツの仲裁によつて領土の一部を取り戻す。日本大使がどれほどヒトラーに進言したか定かではないが、大島は一九四一年ハンガリーから叙勲され、訪問の折に摂政ホルティから故郷のケンデレシ村へ招かれ直接授与された。<sup>48</sup>

### 三 ふたつの大戦間期における関係

#### 三―一 通商条約取極め

今観てきたように第一次世界大戦後ハンガリーは敗戦処理で困難な再出発を余儀なくされる。ハプスブルグの王

位は廃絶されるも旧政治体制は留まり、王のいない王政という暫定的な状態だ。王の代わりには摂政の地位が定められ海軍将校出身のホルテイ・ミクローシュが就任する。日本との外交関係は一九二一年すぐに回復したが、まだこの時は互いの公使館を置くことはできず、日本の場合はウィーンの公使館がハンガリーを管轄していた。今岡がハンガリーに滞在した一九二〇年代は徐々に人々の行き来も増え、日本関係団体は活発な活動を始めていた。今岡は講演などによって有名になり様々な分野で役割も果たしている。ハンガリーの人々の日本への関心は非常に高かったが、彼が不満に思っていたことのひとつは、まだ両国間に通商条約が存在しないため貿易がほとんどできなかったことだ。二国間の関係が本当に活発になるにはやはり民間が参入する条件が不可欠であろう。

また一九二〇年代のハンガリーは領土喪失などで経済的に困難な状況にあり、産業を以前のような規模、レベルに戻すことはほとんど不可能だった。一方日本もまだ現在のように質の高い工業製品で世界中を席捲している時代ではなく、取引の産品もおのずと限られていた。

そんな折一九二七年九月、ウィーンで開かれた国際見本市に日本も参加した。視察に行った今岡は、そこでヨーロッパにはまだ珍しい日本の民芸品や工芸品を目の当たりにし、これを何とかハンガリーへも紹介できないかと思った。

人を通じて、日本商工会議所の代表者として見本市の日本ブースを取り仕切っている中村正太郎と出会う。彼にハンガリーの話をして、今後日本とハンガリーの貿易関係を発展させる重要性を説いた。中村は趣旨に賛同し、手始めにウィーンの展示品をハンガリーへ何らかの形で贈ることを提案する。<sup>(49)</sup>

日本への関心が高い国へ初めて産品を展示する企画は興味をそそられたし、もう品物はウィーンまで届いているのだから実行も単純なように思えた。しかし実際に動き出してみると、これがなかなか簡単にいかない。ネックに

なったのはやはり両国の間に未だ通商協定がないことだ。このために関税問題やら何やらと煩雑な問題が持ち上がってきた。ハンガリーの日本協会もオーガナイズに動いたが、文化活動を目的とする団体では産品を持ち込む機会として適していないし、経済団体と直接協定を結ぶことにも無理が多かった。

そこでいろいろな案を練った挙句、今回は文化・教育目的というカテゴリーを掲げ、教育機関での展示という扱いでハンガリーへ持ち込むことになった。通商協定のない国からまとまった量の産品を国境を越えて入れるには、根拠になる文書が必要という訳で、日本の商工会議所とブダペストの産業教育研究所が合意文書を交わして見本品をブダペストへ運ぶという段取りを整えた。

一連の過程では今岡と日本協会の幹部達がハンガリーの経済省や商工会議所に話を持ち込み、将来の協力について前向きな感触を得ている。とりあえず免税措置や事務手続きの簡素化等では省庁からの全面的な協力が得られた。どこへ行っても今後は日本との関係を大いに進めたいと積極的で、これからの通商協定へ希望が持てる様子だった。<sup>50</sup> 合意文書は一九二七年九月に日本商工会議所を代表する中村正太郎とブダペストの産業教育研究所長のフェレンツ・エミルの間で取り交わされ、今岡と日本協会のメゼイ・イシュトヴァーンが立会人を務めた。<sup>51</sup> 二五個の木箱に納められた贈呈の展示品はブダペストの国民劇場通りにある教育研究所に展示された後、付属機関を巡回展示し最後は素材分析テクノロジー研究所に常設展示されて広く見学者に開かれることとなった。<sup>52</sup>

この展示品はその後一九二八年のブダペスト見本市で公に出品され、限られた品数であったにもかかわらず「見本市で最も人々の興味を引く」展示となった。<sup>53</sup> 飾りつけは華やかな演出がされていて、扇や提灯が掲げられ、着物の色彩が人目を引いた。初めての日本ブース設置とあって注目され、特に民芸品を中心とする展示は連日大変な盛況であった。

一連の営みがきつかけとなり一九二九年一月、両国の間には待たれていた通商取極めが晴れて締結された。そしてこの年の五月に開かれたブダペスト国際見本市に日本が正式に参加することとなった。

今岡は見本市への日本参加に関して準備段階から協力し、ウィーンの公使館、ハンガリー側の実行委員会、日本の出店者との橋渡し役として大いに活躍した。見本市は五月四日から一三日までブダペストの英雄広場に隣接するミューチャルノク（美術ホール）で開かれ日本は全国北海道から沖縄、加えてこの時日本が領有していた朝鮮半島からも出品している。

オープニングに合わせて一般入場の前日、関係者と報道機関が集まり開会セレモニーが開かれた。ウィーンからは日本公使の大野守衛全権公使と共に、後に太平洋戦争で「マレーの虎」と呼ばれた山下奉文が武官として駐在していてブダペストに駆けつけている。またホルテイ摂政も訪れ今岡が案内を務めていた。大野公使は、まだ両国間の貿易額は限られているが、ハンガリーは親日国でありこれからは貿易分野でも期待できるだろうと、本省に報告している。<sup>54</sup>

合計一三五の店から約三千点の品が日本ブースに並べられた。どんなものが出品されたのだろうか。まだ家電やクルマといった工業製品輸出になる前の時代である。東洋的な工芸・民芸品が中心を占めている。ざっと挙げると、陶器・磁気（有田、瀬戸、信楽…）根付け、絹織物、漆製品、小型の仏像、和傘、着物、刺繍の施された織物、べっこう製品、真珠、お香、竹細工品、扇子など、だいたい想像できる日本の品々だ。日用品も並んだ。漁業用網、蚊よけ蠟燭、ゴム底靴、万年筆など。また食料品では日本茶、かに缶詰、醤油、大豆がリストに載っている。<sup>55</sup>

日本が初めて出品した機会であるから、人々の関心は当然、珍しくてエキゾチックで日本的なものに注がれた。特に絹織物や陶器、漆製品、仏像などはその場の即売もあり、あつという間に売り切れた。文房具類については品



質が今ひとつという評価だった。また蠟燭などの日用品は価格が安いということもあってこれもかなり売れた。

今岡は連日会場に足を運び、何度か商談にも立ち会っている。しかしこの時はまだ決済をスムーズに行う取引ルートが確保されておらず手続き処理の仕方も違いが大きく、まとまった注文が成立する商談というところまでは発展しなかった。今回はとりあえず顔合わせというか、まずはお互いを知ることの第一歩という感触だった。<sup>56</sup> 実際見本市後数年間はそれまでに較べ一時的ながら両国間の輸出入は増え、ハンガリーからは工業製品の原料となる金属鉄鋼棒、ゴム製品、工作機械、薬品、革製品、トカイワインなどを含む食料品が日本に輸出された。日本からは米、工業用油、紙製品等を輸入している。この頃はハンガリーからの輸入超過だった。見本市自体は注目を集めて成功したものの、両国の距離により輸送費もかさむ上、まだ商取引上の問題も多かった。

結局この後はブダペストからの招待があつたものの、見本市への参加は見合わせられた。次に日本が見本市に参加するのは両国が政治的に近づいた戦争中の一九四二年であるが、もうこの時は実際の経済活動を進める意味はなかった。

### 三一二 「私的領事」今岡

今岡がブダペストに滞在した一九二〇年代には日本からの訪問者も増えていたし、ハンガリーでは元々日本への関心が高いこともあって公使館の領事業務のような需要が常に存在した。今岡はブダペストに長期滞在し、言葉がよくする日本人として公使館からはかなり頼りにされている。ハンガリー人も名前の知られた今岡に様々な依頼や質問を寄せていた。今岡が残した多くの書簡によってもその「領事」ぶりがよく分かる。いくつかの具体例を挙げ

てみる。

ある日ブダペストの医科大学から連絡が来て、行ってみると動物学が専門でドイツ留学中の佐々木という学者が国際会議出席のためブダペストへ来たが持病もあって咯血し入院していた。病状は相当悪く、今岡は病人のために食堂で日本風の粥を作らせたり何かと助けた。治療は行われたが容態は短期間で悪化し、入院して二ヶ月もたためうちに息を引き取ったのだ。臨終にはキリスト教の牧師も呼ばれた。そして葬儀はウィーンから領事が駆けつけ、在留邦人や関係者が集まって執り行われ、今岡は様々な手続きなどの業務を助けている<sup>(38)</sup>。その年の年賀状に次の言葉を綴った。

「…旧年、祖国から遠く離れ、私の腕の中で亡くなった佐々木教授の事を思い出します。こんな事が起こると誰が想像したでしょう。ハンガリーの人達は、祖国を遠く離れて重病に苦しむ東方からの客に対し、兄弟のような愛情を持って尽くしてくれました。そしてあふれる涙で弔いに参じてくれました。こんな事は誰も想像出来ない事です。教授の死は痛恨の極みですが、私はこういう風に教授を送ることが出来て幸せだったと思います。我々日本人はハンガリーの人々の好意を決して忘れることはないでしょう。」<sup>(39)</sup>

この出来事を地元のペシュトヒルラップ誌も報道し（一月二四日）ハンガリー人は客死した日本人に同情を寄せている。本件は今岡が公私を問わず請け負った領事任務のような仕事のほんの一例であるが、ウィーンから来る賓客に公使館からの依頼で付き添って通訳を務めたことも枚挙にいとまがない。公使館で調べる必要のあった統計資料などを今岡に頼んでくることもしばしばあった様子が遺品に残る書簡から判る。

また、ハンガリー人達からはまことに種々雑多なあらゆる分野における依頼、照会などの手紙が送られてきた。大臣までが本来ウィーンの公使館を通じて行うような頼みごとをしている。例えばヴァシユ・ヨージェフ文部大臣

が日本のパートナーから送られた写真に対して先方に礼を伝えるよう今岡に依頼した手紙（一九二七年一〇月七日）。ある時は地理研究所から、第一次大戦以前にブダペストで活動していた地理学者脇水鉄五郎の収集品が残されているから、それを日本へ送るべく相談を持ちかけられている（一九二五年三月一三日）。また両国の赤十字青年部が活発な交流をしていたと見受けられるが、日本から届いた記念アルバムについても今岡に翻訳とその扱いについて相談している（一九二七年五月一七日）。

こういった一般的な依頼事項だけでなく、もっと専門的な領域の依頼もあった。例えばハンガリー動物保護協会からは日本の狂犬病予防接種についての資料を求められている（一九二八年四月一六日）。またある時は日本でツラン主義を広めるため設立された東京のツラン協会がハンガリーの要人たちと交流関係を築いていて、訪日した元首相シモニ・シェマダム・シャーンドルを介してホルテイ摂政に日本刀を贈ったことがあった。これが無事に届けられ元首相以下、関係者が参列して摂政に刀を渡すことになった。今岡はこの席にも日本協会から要請されて出席している（一九三〇年六月二〇日）。このような場面は、通常公使館からしかるべき代表者が出席するところであつたらう。今岡が半ば日本の公使館を補うような立場と見做されていた様子がわかる。

依頼は国内だけでなく、ハンガリー人の居住する周辺国からも来ていた。例えばスロヴァキア領のナジシャロー村にある植物品種改良協会からはミキモト真珠や会社についての詳しい情報や日本のさとうきびの精製についての専門的で長い質問状が届いていた（一九二八年六月一五日）。

これらは依頼を具体的に示すため列挙したに過ぎないが、とにかく思いつく限りの様々な手紙の束である。全体を見渡すと、多くは今岡の講演の聴衆や、記事の読者から来ていたようだ。一番多い依頼はどこからか入手した日本語の翻訳を頼んでくるものだった。次に多かったのは意外にも日本での仕事の斡旋。しかし大正から昭和初期と

いう時代を考えると、往来もまだまだ困難な時、突飛な感じがしないでもない。ベーケーシュチャバに住む二人の機械エンジニアから来た手紙にはこうある。

「私たちは工業が発展しつつある国で働き、将来の生活設計をしたいと思ひ……」

日本がこんな風に見られていたのかと思うとともに、いささかりアティーに欠ける計画とも感じる。今岡がどんな返事を出していたのかは想像するしかないのだが……。

今岡は滞在の最後にこのような領事的業務のハイライトとして、一九三一年一月の高松宮夫妻のハンガリー訪問に通訳として同伴した。準備段階から公使館と連携して行くべき場所、会うべき人、ホテルの選定などプログラム全般で進言している。そしてオペラ座における君が代斉唱の練習まで駆り出されていた。滞在は三日間。公式訪問に準じる待遇でホルテイ摂政はじめベトレン首相らが宮殿や首相府にて晩餐会を催し、宮夫妻は審議中の国会へ登場して議員らから熱烈な挨拶を受けられた。日本関連団体とも面会し東洋美術館で日本美術のコレクションを見学した。その他オペラ座での鑑賞やマーチャーシュ教会や英雄広場などを視察している。このように未だ公使館のないところに皇室から公式に準じる訪問をするなど今では考えられないが、訪問が日程に上がる過程では今岡を通じての情報や、実質的な協力というものが非常に有用であったと考えられる。今岡はハンガリー滞りの最後にハンガリーから叙勲されているが、公使館も彼に感謝状を贈ってその労をねぎらっている。

### 三―三 文化協定締結とその後の営み

さて今岡が帰国してからの一九三〇年代後半、日本とハンガリーは文化協定を巡って接近する。文化協定を締結

するという案を最初に提案したのはハンガリー側である。というのもハンガリーは既に一九三〇年代の前半より、外交の一環として欧州の数カ国と文化協定を結んでいる。ハンガリーから提案があったのは一九三五年であるが、その際このような協定をまだ結んだことのない日本の外務省は積極的とは言えぬ慎重な態度で応じていた。とりあえずは交換留学生の枠を作る、という程度の協力関係を考えている。こういった態度は間もなくいくつかの理由によって変化する。ひとつは日ソ関係である。共産主義政権が樹立してから日本はソ連を警戒の目で見ていたところ、ハンガリーという中欧の国との降って沸いた協力関係を情報収集に役立てようという意見が出てきた。ウィーンの前日本公使・谷正之は東京の本省宛の電報で、ソ連関係の情報を集めるためにも日本は今後中欧諸国と緊密なネットワークを構築する必要がある旨具申している<sup>⑥</sup>。また外務省内でも、協定締結を推し進めるべく、当時の国際情勢における日本の立場を鑑み、国際的に孤立しつつある日本にとつては、こういった文化を前面に出した協定は、世界へ向けてのデモンストレーションとしても役に立つだろう、という意見があり、省内でもこの協定の締結に向けて積極的な姿勢へと一気に動き出したのである。またこの協定では対外文化関係を推進するため広く金銭的援助をしていた三井高揚男爵が関わったことも重要である。このように締結過程ではソ連に対する情報収集が目的のひとつになっており、両国はその後三国同盟で軍事的な同盟関係になり、確かに情報収集分野でかつてない協力関係を築いている。これについては後ほど述べる。文化協定がそういった方向の試金石になっていたと言えるだろう。

協定締結の過程ではもうひとつエピソードがある。もう条文も整い、締結の署名に向けて準備が進んでいたところ、日本の同盟国であるドイツから横槍が入る。つまりこういった協定はまずドイツと最初に結ぶべきだということである。外務省内ではこれを実現しようと試みた形跡があるが、駐ハンガリー日本公使松宮順がこれを拒否し、とりあえず調印式は予定通り行われた。しかし直後にドイツとの間で、ハンガリーをモデルにした日独文化協定が結

ばれ、こちらは調印してから批准手続きを待たずにすぐ発効するという法律的手法を駆使し、結局日独協定が最初の協定となったのである。<sup>65</sup> こういう事からもこの協定が政治的な色を帯びていた様子が判る。

一方、ハンガリーでは既に日本への関心は高く、第一次大戦前の時代からいくつかの探検隊や派遣団、研究者、美術コレクター、ジャーナリストが訪日しているし、日本に関係する民間団体も出来ている。例えばツラン協会、日本協会、ケーレシ・チョマ・シャーンドル協会などである。こういった背景があり、日本との文化協定締結についてはむしろ自然な流れであり、特に議論が出たり、説明を要したりする必要もなかったくらいである。<sup>66</sup> 批准に際して、当時の文化相ホームマン・バーリントはこのような文化的相互協力関係が基礎となり、政治的、経済的関係の発展へとつながっていくべきだろう、と強調している。<sup>65</sup> この辺りには文化協定締結に対する両国の温度差が表れている。

協定締結は相互の大使館開設にも勢いを与えた。文化協定の批准後、日本では外務省を中心にして日洪文化協定連絡協議会と称する委員会が設置されて最初は毎月のように会合が開かれ、具体的な活動内容につき協議された。一九四〇年一〇月二十九日の第一回会合では近衛文麿首相や松岡洋右外相の挨拶が読み上げられた。続いてハンガリーよりテレキ・パール首相、チャーキ・イシュトヴァーン外相、ホームマン文化相の挨拶電文が披露された。儀礼的なものではあるが、内容に親密さは十分表れている。テレキ首相は「この協定により随分以前から抱いていた自分の夢が現実しつつかある」と述べ<sup>66</sup>、松岡もハンガリーの防共協定参加の意義を強調し、この協議委員会が政府に対しても専門的な見地から具体的に提言することが期待されると述べている。<sup>67</sup>

一方ブダペストでも一九四〇年九月二三日にハンガリー側の第一回の協議が文化省で開かれている。参加者はシイリ・カールマン文化省次官、パイケルト・ゲーザ大臣顧問官、在ウィーン日本公使の井上松太郎らである。

こちらでも具体的な活動について協議され、戦争終結後は相互に文化研究所を設立することなどが話し合われた。<sup>68)</sup> 日本での連絡協議会は一九四〇年から一九四四年まで九回開かれ今岡は委員として中心的な役割を果たした。財政関係を始め行事や人的交流等、具体的な案件が話し合われた。同時に日洪文化協会なる団体が設立されて、ハンガリー関連の様々な行事を催し、機関誌『日洪文化』を発行していく。このいずれにも今岡は会の常務理事、機関誌の編集長として活発に活動した。会員を広く募り政財界、官僚、文化人、学者、芸術家などをはじめ二五〇人ほどになっている。運営は会費のほか国が補助を出し、三井男爵は相当額の寄付をしていた。行事というのは講演会や展覧会、冊子や機関誌の発行、双方へ向けたラジオ放送、交換留学生の実施などだ。

機関誌『日洪文化』は一九四一年から一九四四年まで一六号発行され、基本的には会員向けのものである。平均すると五〇頁ほどの冊子で、幅広くハンガリー事情を紹介し、文学の翻訳も掲載した。ハンガリーの政治経済に始まり、伝統、民俗風習、産業、教育、地理、外交、文学、歴史、村の生活等々あらゆる分野に及んでいる。編集と翻訳は今岡が担当した。広く一般に発行されたものではないが、ハンガリーに関心のある人達にとっては詳しい情報を提供したと言える。当時はまだ一般の人が簡単に海外へ行けたわけではないし、テレビもなかった時代であるから、知識を普及するという点では現在とは較べられない貴重な機会を提供してその意義は高いと思われる。活動全体は国の補助が出ていたものであり、戦時中の活動であるから政治的な色があったことは否めない。しかしハンガリーというあまり知られない国を初めて体系的に紹介した試みであり関心のある人達には多くの情報が提供され、全くのプロパガンダという訳でもなく、中には現在でも有用な情報も含まれている。時代と社会情勢に合った水準の知識普及がなされたと言えるだろうし、ハンガリーに対して日本人の親近感を高める役割も果たした。未だに残るハンガリーのイメージはこの時に形成されたものであろう。例えばウラル・アルタイ民族という表現であ

るとか、ハンガリー人の赤ちゃんには蒙古斑が出るというような言い伝えである。<sup>20)</sup>

敗戦を迎え協会は廃止された。一九四五年の秋ごろ今岡や三井会長はまだ今後の活動へ望みをつないでいきたい思いを抱いていたが、もうそれはかなわぬ夢であった。日本は独自の外交もできない状態だったし、両国の国交も休止しその後は冷戦で敵対する陣営に分かたれてしまったのである。

### 三―四 ハンガリーの三国同盟参加

前述の文化協定と同時進行であったハンガリーの三国同盟参加とそれに関わる両国関係についてもここで触れておく。ハンガリーは文化協定調印後、日本からの強い働きかけもあって満州国を承認し、ほぼ同じ時期に日独防共協定にも参加した。一九三九年二月である。その後日洪文化協会による一連の活動が行われている最中、一九四〇年九月に結ばれた日独伊三国同盟にハンガリーも参加することになった。太平洋戦争開戦の直前である。これは軍事同盟であり、日本とハンガリーは軍事同盟を結ぶような直接的利害関係があったわけではない。欧州情勢の中で領土問題や時の政治的判断でハンガリーはドイツに組みせざるを得なく、この同盟に参加した。同盟参加を交渉する過程で、最初日本は必ずしもハンガリーの参加を歓迎していたわけではなく、今後満州を参加させる可能性について言及し、ドイツとの間で均衡を取ろうとしている。実際にその旨を書面でも確認していた。<sup>21)</sup>ハンガリーと日本はいわばドイツを介して「同盟の同盟」になったにすぎなかったのだが、時は既に戦争への道をひた走っていた。時局柄、同盟国が増えたことにつき表向きは当然歓迎され、日刊紙もこぞって「新しい同盟国ハンガリー」と報じている。「血は水よりも濃い、新しき盟友ハンガリー」（国民新聞）「さあけふから兄弟、ギカ公使も大はしやぎ」（読



売)「結盟の夜の洪公使館 歓声渦巻く乾杯、失地回復が合言葉」(中外商業新聞)など派手な見出しが躍っている。

一月二〇日の調印式はウィーンのヴェルベデーレ宮殿で、リッベントロップ独外相、チアノー伊外相、来栖駐独大使、チャーキ・ハンガリー外相により行われ、写真もデカデカと新聞の一面に出た。調印式後の晩餐会にはヒトラーも同席している。ハンガリーが本邦日刊紙の一面を飾った最初の機会となった。折りしもハンガリーはドイツの仲介もあって悲願だった領土の一部を取り戻した時期であり、朝日新聞も地図入りの大きな記事を掲載している。外相テレキの紹介やブダペストの町並みなどが、ハンガリー公使や今岡らを通じて多く語られている。調印の様子を始め、公使館での記念パーティーやブダペストの写真などが新聞紙上を賑わせた。公使館のパーティーには同盟国の外交官はじめ日洪文化協会関係者ら大勢が集まった。マスコミも呼ばれ、お国事情を聞こうと今岡を記者らを取り囲んでいる。両国を結ぶエピソードとしてホルティ摂政は特に日本びいきである事を強調した。日露大戦の頃若い海軍兵として来日した際、腕に日本男女の入れ墨をし、機嫌が良いと親しい人に見せられる。そして実は自分もそれを見た、といった逸話を披露している。ギカ・ジェルジ駐日公使もその時の興奮した様子についてハンガリー向けのラジオで、祝いの訪問や電話がひきもきらない様子を語っている。これほど日本中の歓迎してくれるとは、と感激した様子であった。<sup>24</sup> こうして両国の間は益々密接な関係が発展していった。

文化協定締結過程ではソ連に対する情報収集が目的のひとつになっていたことを先に述べた。そして数年後両国相互に公使館が設置され、ハンガリーの三国同盟参加で軍事的な同盟関係にもなり情報収集分野で両国はかつてない協力関係を築いている。文化協定はひとつのきっかけを与えたと言えるだろう。ハンガリー人の研究者ウィンテルマンテル氏とシヤライ氏がこの時期の武官どうしによる協力関係についてハンガリーの公文書を基に詳しく報告しているが、それによると特にソ連に関する機密情報、諜報、暗号解読などの領域では密接なやり取りがあり、モ

スクワ、欧州、トルコに駐在する両国武官同士も緊密な連携を持っていた。ハンガリーがカルパトウクライナ地域を奪還してソ連と国境を接することになり、また独ソ不可侵条約の締結、ドイツのポーランド侵攻と欧州の政局が進むなかでハンガリーの重要度が増したことも、日本にとってはハンガリーと軍事関係を強化する要素になっていた。例えばアンカラ駐在のネーメト・イムレ大佐はやはりアンカラに駐在していた芳仲和太郎武官と親しい関係にあり、ハンガリーへの特別な親近感に支えられた最も信頼できる連携だったと述べており、芳仲はこの後一九四〇〜一九四二年ブダペストへ赴任している。また他にもソ連の暗号電文解読や軍事情報の収集で相互に緊密な関係が出来ていた様子がわかる。<sup>⑬</sup>この芳仲を始めとしてブダペストに駐留した日本の武官数人に対し、一九三八年からほぼ毎年のようにハンガリー政府より勲章が授与されている。日本からもパートナーに対し、頻度はやや少ないもののお返し⑭の叙勲が行われていた。これを見ても両国間では相当な協力関係が築かれていたことが伺える。そして領土問題の項で述べた、ウィーン裁定での大島大使の進言などへと続いていったのである。

#### 四 冷戦の両側で

##### 四―一 一九五六年ハンガリー動乱の影響と国交回復

終戦となりしばらくは独自の外交も出来ない日本とハンガリーの間は国交も休止状態となる。今岡らは「今後大  
国としての權威なき我国外交は運命を共にする成る可く多くの小国と提携して大国の専横を阻止し、小国の共同利

益を擁護せざるべからず」と今後日本が新たな外交を始める上でも小国との関係が重要、と外務省に働きかけているが、一八〇度社会が変わりつつある日本ではもうリアリティーもなかった。そして今岡もほぼ一〇年近く沈黙を強いられる。在京のハンガリー公使館員たちもまた混乱の中、事態を見極めるにも時間がかなり不安な日々を送っている。ドイツ側について敗戦を迎えたハンガリーは東西の綱引きでその運命は翻弄されソ連配下に入れられようとしていた。公使館員たちは難しい選択を迫られる。日本は占領下となり、ハンガリー本国の混乱する様子にしても手に取るように分かるわけではない。占領軍がハンガリー人らを敵国民として捕虜扱いしないよう方々に手を尽くすのが精一杯だった。一方で本国がこれまでの政治的状況と全く相反する社会になることは目に見えており、皆あまり帰国を急いではいない。

日本語をよくし文学の翻訳までものにしていたメツゲル・ナードルは一九四六年の二月にアメリカへ、そして公使のヴェーグ・ミクローシュは四月になってポルトガルへ発った。最後まで残ったのは広報を担当していたハバーン・イエネーで、彼はワシントンのハンガリー公使と連絡を取りながら、日本を始めアジア地域に残留のハンガリー人に対して五年間という長い間、領事業務を引き受けていた。この間今岡も時折連絡を取っている。公使館といっても元になる本国との交信は絶えていて、生活のための送金さえもない。最後は公館の家財を売って生活を営んでいたという。まさに戦後混乱の異常事態だ。そしてハバーンは一九五〇年の秋になった頃、三つのコンテナを用意しハンガリー国旗と銀製品、それに残った公文書を詰めてワシントンのハンガリー公使館へと送り出した。こうして最後の仕事を終えると彼もまたハンガリーから遠く離れたアルゼンチンへ向けて出立していった。

さて国交が復活していない中で数年の空白の後、日本はサンフランシスコ講和で自主的な外交を取り戻し多くの国と外交関係を再開した。しかしこの時も冷戦の両陣営という壁は厚く東欧諸国とはすぐに関係回復をしてい

い。それでも事務レベルでは一九五〇年代半ばから準備に取り掛かり、細々とはあるが歩み寄る試みが始まっている。まずは左派国会議員の訪問であるとか、第三国を通した通商・貿易活動、あるいは限られた範囲の文化交流などだ。外交回復のためにはまず一九五六年の日ソ共同宣言が必要だった。まさにこの署名が一月一九日にモスクワで行われ、社会主義圏諸国の外交関係回復のためのお膳立てがやっと揃ったその一〇月に、一九五六年ハンガリー動乱が起こる。共産主義圏で初めて民衆が蜂起して世界を震撼させ、日本の左翼運動にも大きな影響を与えた。この事件によりハンガリーとの国交回復は棚上げされることになった。折りしも話し合いのため北京のハンガリー大使館員が来日していた。しかしもうその話し合いは出来ずじまいとなった。

動乱が起こってから日本ではハンガリー救援会が設立され募金活動などが全国に広がった。一連の動きは一方で時の政権と結びようとしていた外交関係にブレーキをかけることになった。ポーランドやチェコスロヴァキアは一九五七年から順に外交を復活させていくが、ハンガリーは一九五九年まで待たねばならなくなった。動乱に関する今岡の活動は第一章で述べた通りであるが、救援会活動で難民を助けた今岡とハンガリー当局との関係は当分の間冷淡なものであった。

一九五七年に開催された外務省の欧州大使会議でもまだ「ハンガリーとの国交回復はその時期にあらずとの公館長一致の意見」であり、カードール政権を非難する西欧諸国と足並みを揃える外務省の態度が窺われる。それでも一九五七年の春以降は主にハンガリー側から日本に対して熱心な外交関係回復への働きかけがなされている。国交のある第三国においてハンガリー大使が日本大使に国交回復への希望を伝えていた。例えばモスクワ、ストックホルム、ベルンの各大使への働きかけがあった。そして徐々に交渉は進み、一九五九年八月プラハでやっと外交関係復活の文書が調印され、翌年には双方の公使館が東京とブダペストに再び設置された。一五年ぶりのことである。

今岡や戦前ハンガリーと関わった仲間が集い、友好協회를再び立ち上げるべく準備をしていた。有志が集まり今岡ら旧時代の人達に新しく羽仁五郎ら左派の知識人も加わった。会長は戦前の駐ブダペスト公使井上庚二郎が就任している。しかし東京に公使館開設となつて初めて赴任したチャトルダイ・カーロイ公使はその辺りの微妙な空気を察し「この集まりに対しその営みについては介入したくないし、多くを期待することはできない」と冷淡なコメントを残している。その後二代目の公使ザルカ・アンドラーシュになつてもう少し積極的な姿勢になるものの、やはりイデオロギーの対立から抜け出すことは出来ず、この時の友好協会の試みは軌道に乗らずに終わつてしまつた。<sup>(28)</sup> 異なつたメンバーにより新しく友好協会が組織されて本格的な活動になるのはかなり先、一九七五年のことである。

#### 四―二 冷戦下の両国関係と今岡

戦後、今岡にとつて表立つたハンガリー関連の仕事はほとんどなくなつてしまつたので、フィンランド語の辞書を書いたり、本格的なハンガリー語辞書の編纂に情熱を注いだ。一九六〇年代の半ばにこのハンガリー語辞典の原稿はほとんど仕上がつていたが、特殊語の辞書であり出版はなかなか困難なことだつた。今岡は何か協力が引き出せそうなどころへは足を運び、大使館の門も叩いた。もはや選んでいられなかつたのだ。ところが大使館では検討するといふ名目で今岡から原稿を預かり、その後なかなか戻つてこない。結局一年以上、原稿を止められた挙句、戻つてきた原稿はあちこち抜け落ちていた。今岡は何度も大使館へ足を運んでは催促するものの、相手は話をかわすばかりである。<sup>(29)</sup> 五六年の動乱時に自身も共産主義体制の矛盾や生活の困難さを書いたのだが、まさにその断片を目の

あたりにし、実際に不条理を被った感じがしたものだ。ほとんど自費出版で出したハンガリー文学の翻訳書も、何か購買に結びつくきっかけがあるかと思ひハンガリー大使館に持ち込んだ。しかしこれもしばらくするとあちこち黒い墨で乱暴に消された無残な姿で返ってきたりした。<sup>80)</sup>

「これがハンガリーの現実だな」と思い知らされるような気がした。大使館で接する書記官らの態度や物腰は、その昔今岡が接したハンガリーの人々とは相当違い、どこか懐疑的で率直さのない、本音で物事を語っていない感じがつきまとった。そしてこの原稿の一件があり今岡は変わってしまった第二の故郷にむしる寂寥感を覚えていた。

外務省囑託の仕事も戦後はなくなり、一時期は辞書編纂のため省内に机ひとつだけ提供されて通っていた。外交関係が復活してしばらくするとハンガリー語のできる専門官を外務本省でも養成することになり、今岡はその研修の講師になった。赴任する前の若い事務官二人（河合智司元中央アフリカ大使、小平功元マイアミ総領事）に言葉の手ほどきをし、ハンガリー事情を伝えている。

ハンガリー大使館との間に少し変化が訪れたのは最晩年になってからだ。ハンガリーからも初めて日本語の出来る外交官が赴任してきた。一九七一年に赴任したマーチュシュ・シャヤンドルである。今岡は日本語を勉強したこの若い書記官と打ち解けて話すことができた。マーチュシュはあまり先入観を持たずに今岡と幾度か会っている。ハンガリー語が流暢なのにも、知識の豊富さにも舌を巻いた。そしてイデオロギーなどは別なところで、今岡がハンガリーをどれほど大切に思っているかを感じ、加えて日本で今岡によって翻訳出版された作品の数々に目を見張った。これほどハンガリーの紹介に力を入れていてもそれによって見返りを得ていないことは容易に想像ができた。そして彼にハンガリーから何かお礼の気持ちを表したいと思った。何しろ冷戦の真っ只中であるし、高位の勲

章などはまず党の活動やそれに関わるものが優先された時代である。それでも今岡の抜きん出た文化活動は表彰に値すると思つた。当時、外国との交流の窓口になつてゐたのは対外文化協会という組織である。そこが毎年、何人かの外国人にも功労賞を出してゐた。これに申請することを考えた。そして亡くなる前年の一九七二年、大使館において今岡に功労賞の賞状と記念のメダルが贈られた<sup>(8)</sup>。今岡はその褒章をすなおに喜び、昔のハンガリー人を思い出して体制の違いを忘れる一時をかみしめたであらう。

辞書の自費出版準備は遅々としながらも進んでゐた。一九七三年、両国間には再び文化協定が結ばれることになつた。そのため四月四日から一日にかけてハンガリーからペーテル・ヤーノシュ外相が来日した。その協定締結の場で、仮刷りで刷られた今岡の辞書が当時の大平正芳外相からペーテル外相に贈呈されている。今岡はこの頃、入退院を繰り返すような状態であつたが、彼の最後の仕事が外交上の場面でも役割を果たしてゐた。ペーテル外相は東京での晩餐会に今岡を招き、辞書刊行を祝い今岡の労をねぎらつたという<sup>(9)</sup>。こうして限られた範囲の中ではあるが、両国間の基本的な条約などは徐々に整ひ文化やスポーツなどの分野で人の交流も増えていく。しかし、それらはいくまで限られた関係であり、元々国民に対して旅行の自由も保障されていない体制の下であるから行き来といつても一部の人々という意味である。戦前の関係に政治的な色があつたことは否めないが、戦後はネガティブな方向でより政治に影響される関係が長く続いてゐた。これが本当に自由で率直な、あらゆる分野での交流となるのは一九九〇年の体制転換を待たねばならなかつた。

おわりに

本稿では日本・ハンガリー関係史の上で最初の架け橋となった今岡十一郎の生涯を概観し、彼の活動を通して見える両国外交史の特徴を史料を基に考察した。両国関係は比較的早く、日本が開国して間もない時期に外交関係が結ばれているが、この時はオーストリア・ハンガリー二重君主国との関係である。列強のひとつであった君主国と日本は不平等条約を結んでおり日本にとっては条約改正が長い間目的であった。第一次世界大戦で欧州の秩序は大きく変わり、日本は戦勝国としてパリ講和に署名する。ハンガリーにかつてない悲劇をもたらしたトリアノン条約に署名し、その後ハンガリーの国境線画定では委員として日本人も参加し比較的中立的な立場を取っている。それはハンガリーでも認識されており、大戦間期にハンガリーで盛り上がった領土復活運動の中で日本への期待となっていた。列強のひとつと世界外交の舞台へ出てきたばかりの日本、という関係から、君主国が瓦解して小国になったハンガリーと国際社会の中で戦争を経て大国になりつつある日本という対照的な変化が見て取れる。

一九二〇年代から外交関係はあったものの公使館がまだ相互には設置されておらず、ウイーンウィーンの公使館がハンガリーを管轄していた。同国では日本への関心が高く様々な領事業務が発生していた。今岡は言葉をよくするブダペスト長期滞在者として公使館からの要望に答え「私的領事」ともいうべき活動を請け負っていた。彼の仲介によりウイーン見本市の日本展示品がハンガリーへ紹介され、それをきっかけに両国間で通商取極めが結ばれた。その後両国間で貿易が開始される。

一九三〇年代には文化協定を巡って両国間には密接な関係が発展する。文化協定とはいうものの、それは戦争へ向かう時期のことでありそれぞれに思惑を持つての協定であった。日本側はハンガリーを通してソ連の情報を得よ



うとしており一時期両国間では武官どうしの協力関係が展開されていた。一方、文化協定に相応しい活動も展開されており日本における日洪協会の行事や書籍を通してハンガリーについてのかつてない多角的な情報もたらされ、今に残るハンガリーイメージの基礎が築かれた。大戦間期は相互にまだ公使館がない時期から活発な外交活動が始まった。そしてお互いに政治的な思惑もあり、相互の公使館設置を経て交流が広がった時期である。

戦後、両国は冷戦の両側に分かれたれ国交も休止している。ハンガリーはソ連圏に組み込まれ日ソ共同宣言まで国交復活さえままならなかった。ハンガリー動乱が起こり今岡は蜂起した民衆の側で救援活動を行った。一方この事件で国交回復はまた遠のき一九五九年にやっと回復する。その後基本的な条約等は整いつつも交流は限られたものであり、イデオロギーの壁は高くそそり立っていた。戦前も政治的に影響を受けた両国関係であったが戦後もまた政治的な状況がその関係のあり方に固い枠をはめていた。そのような中でも一九七三年、新たに結ばれた文化協定の記念として、病を患う今岡が一人で情熱を傾けて仕上げたハンガリー語辞典がハンガリー外相に贈呈された。今岡の活躍した時期の両国関係はやはり政治的な影響に翻弄された関係だったと言える。

限られた形の両国関係が抜本的に変化するには一九九〇年の体制転換以後である。現在はようやく制約や強制から自由で率直な交流が発展している。ハンガリーは二〇〇四年、EUに加盟し、また新しい枠組みでの関係が始まっている。今後、開示された史料を基にした外交の始まりから現在に至るまでの総括的な両国交流史の作成が待たれる。(ハンガリー人名については現地表記に従い姓・名の順とした。)

【本稿は国際交流基金のフェローシップ(二〇一二〜二〇一三年)として東京に滞在し調査研究した成果の一部を含むものである。】

註

- (1) 拙著 *A Japan-tengerőlt a Duna-partig*. Budapest, 2006 など。
- (2) 今岡の生涯についての詳細は、津田塾大学に収められた遺品の史料を基にしている。書簡や草稿、ポスターなどは目録化されていないので日付及び「今岡文庫」とだけ記す。
- (3) 今岡の長女、小野顕恵氏との面談、一九九九年五月二十日
- (4) バラートシ・バログ・ベネデク (Barátosi Balogh Benedek 1870-1945) 民俗学者、元は小学校長。三度来日し、三巻の大冊『大日本』（一九〇六）や十八巻のツランシリーズを刊行した。アイヌ民族についての貴重なコレクションがあり、ブダペストの民族学博物館に納められている。
- (5) ツランとは元々古いペルシャ語でイランから北の平原を意味するが、ユーラシア大陸でアリアにもセムにも属さない民族の総称としてツラン民族という言葉が使われた。広義にはすべての膠着語を話す民族に当てはめられ、ハンガリーも日本もこれに属すとされた。ハンガリーのツラン協会（一九一〇〜一九四五年）は当初学術団体として活動し会報「ツラン」を発行し多くの論文が発表され、ツラン民族の研究、友好関係の構築等を目的としていた。この思想は科学的な裏付けはなかったものの当時ハンガリーの文化、芸術の広い範囲に大きな影響を与えた。
- (6) 「虐げられたるツラン同胞よ結合せよ！」『力行世界』一九二二年四月号
- (7) 「ツラン民族連盟せよ」『東京日々新聞』一九二二年四月一六日など
- (8) 例えば次の記事 „A japán bevándorlási tilalomról, japán-kinai barátságáról.” *Tasárnap* 1924. július 20. „Az amerikai bevándorlási törvény új irányját adott a japán politikának.” *8 órai újság* 1924. augusztus 5.

- (9) Imaoka Dzsucsiró: „Mit kérdeznék a japántól Magyarországon?” *Új Nippon* (Budapest, 1929) pp.258-265.
- (10) 今岡本人の後の記述では記事や講演の回数が七〜八百回とあり、この数が時折引用されるのであるが、遺品に残る記事の切り抜きやポスターの数はそれぞれ概ね一五〇前後である。今岡はかなり几帳面にこれらの記録を残していたようなので、これの数倍という数は滞在期間から推測しても現実味に欠けると思われる。
- (11) 例えば „Milyen a Japán izlés?” *Budapesti Hírlap* 1925. november 4., „Japán szilveszter” *Magyarország* 1927. január 1., „A Japán hazátság” *Magyarország* 1926. július 25., „Fűrű, milyenek a Japán lakás, kert, szoba?” *Magyarország* 1927. május 1.
- (12) 「文化のタベ」と題しラーコシセントリハイで開催された今岡講演のポスター一九二六年七月一〇日、今岡文庫
- (13) 今岡の甥、吉岡達雄氏との面談、二〇〇六年七月五日
- (14) 入場料は数千から一万コロナ前後。支払い書では例えば地方へ出かけて三回の講演で一三七万コロナが支払われている。コグトヴィッツ・カローイ、フェレンツ・ヨージェフ大学教授から今岡宛の書簡に同封された支払い書一九二六年三月三日、今岡文庫
- (15) *Magyar Kultúra* 1930. augusztus 15. sz., *Protestáns Szemle* 1930. szeptember sz., *Napkelet* 1930. február sz.
- (16) III. osztályú magyar érdemkereszt
- (17) カタリン舞踏会一九二七年二月九日、ポーランド舞踏会一九二八年二月二〇日の招待状、今岡文庫
- (18) 今岡からセーケイ・アンドル、マルトンヴァーシャーシル貯蓄銀行頭取への返書の写し一九二七年一月一六日、今岡文庫
- (19) 「国民外交の選士、今岡氏十年振りで帰朝」『日本』一九三一年一月二二日

今岡十一郎の活動を通して観る日本・ハンガリー外交関係の変遷（梅村裕子）

四四

- (20) 今岡一九二九年の年賀状、今岡文庫
- (21) 「東洋の血を受けたハンガリー人の生活」『サンデー毎日』一九四〇年二月一五日号、二三〜二五頁
- (22) 日洪新書としてこの他『ハンガリーから観たバングルマン主義とパンスラブ主義』（一九四三）、『欧州におけるハンガリーの地位』（一九四四）、『ハンガリー物語歴史』（一九四三）が出版された。
- (23) 松浦正孝『大東亜戦争』はなぜ起きたのか』二〇一〇年、三六〇〜三六二、四七二頁
- (24) 今岡一九二九年の年賀状、今岡文庫
- (25) 日本ハンガリー救援会報第四号一九五七年一月
- (26) 前掲註(2)小野氏との面談
- (27) ペーター・パンツァー『日本オーストリア関係史』一九八四年、四四〜四五頁
- (28) 例え<sup>に</sup> Kreimer Gusztáv: *Gróf Széchenyi Béla keleti utazása*, 1892. Gróf Vay Péter: *Kelet császárai és császárságai*, 1906. *A keleti felteken*, 1918. Barátosi Balogh Benedek: *Dai Nippon*, 1906.
- (29) Csonkareti Károly: *Császári és királyi hadihajók*. Debrecen, 2002. pp.75-87.
- (30) Mezey István: *Az igazi Japán*. 1939. pp.95-129.
- (31) 牧野伸顕『回顧録』下一九七八年、一九五頁
- (32) 今岡一九二八年の年賀状、今岡文庫
- (33) 今岡の年賀状一九二八年及び一九二九年、今岡文庫
- (34) クレーベルスベルグ・クノ伯爵 (gróf Klebelsberg Kuno 1875-1932) 政治家、文化大臣（一九二二〜一九三一年）、教育制度の整備と改革、また文化政策の分野で高い功績を挙げた。同氏より今岡への書簡一九二八年一月

三一日、今岡文庫

(35) モーラ・フェレンツ (Móra Ferenc 1879-1934) 作家、博物館長。生涯セゲドで過ごし農民や市井の人々を題材にしたユーモア小説で人気を博した。青少年文学でも優れた作品を残し現在でも読み継がれている。同氏より今岡への書簡一九二九年一月三日、今岡文庫

(36) サパリー伯今岡宛書簡、一九二七年一月七日、今岡文庫

(37) パーイ・デーネシュ、ノーグラード・ホント県知事より今岡への書簡一九二七年二月二十九日、今岡文庫

(38) ファルカシュ・ヤーノシュより今岡への書簡一九二七年二月三〇日、今岡文庫

(39) ヴラシッチ・ジュラ男爵 (baró Wlasiics Gyula 1852-1937) 文化大臣 (一八九五〜一九〇三年)、貴族院議長 (一九二七〜一九三五年)。今岡宛書簡一九二九年一月二日、今岡文庫

(40) セーチェーニ・バーリント伯爵 (gróf Szechenyi Balint 1893-1954) 奥洪君主国軍の少将、一九世紀ハンガリーの改革を進めた高名な政治家セーチェーニ・イシュトヴァーンの孫。同氏より今岡への書簡一九二九年二月二八日、今岡文庫

(41) ボゾーキ・デジェー (Bozoky Dezső 1871-1957) 奥洪君主国海軍医。船医として来日しそれをもとに二巻の大冊 *Két év Kelelészibán* (「東アジアでの二年間」一九一一) を著し一巻が日本の記述に当てられた。

(42) 分割された旧ハンガリー領の地名。記述順にブラチスラヴァ (スロヴァキア)、コシツェ (同)、クルージュナポカ (ルーマニア)、アラド (同)、スポティカ (セルビア)。

(43) ナジ・イヴァーン (Vitez Nagy Iván 1868-1947) 文化省局長顧問、ペーチ大学教授、日本協会副会長。今岡宛書簡一九二九年四月一日、今岡文庫

- (44) Magyar-Csehszlovák Határmegállapító Bizottság. A magyar biztos iratai 1921-1922. Hadtörténelmi Levéltár
- (45) 「巴里平和諸条約一九一八年国境画定委員会」2:3.144-1「チェコスロヴァキア」、匈、埃、波蘭、独間、外交史料館
- (46) 同上 44-2 羅、匈間、及び佐野の終末報告書
- (47) Wintemantel Péter-Sallay György Pál: „A magyar-japán diplomáciai kapcsolatok története, 1918-1945.” p.147 In: *Tanulmányok a magyar-japán kapcsolatok történetéből* 2009. Budapest
- (48) *Ibid.* p. 167.
- (49) „Japán ajándéka Magyarországnak.” *Turán*, 1927. III-IV, pp. 109-110.
- (50) メゼイ・イシュトヴァーンより今岡への書簡一九二七年八月一日、今岡文庫
- (51) Nagy Iván: *Nagy Kelet-Ázsia*. 1943. pp.127-128. Függelék pp.66-167.
- (52) フェレンツ・エシル教育研究所長から今岡への書簡一九二七年一月一日、今岡文庫
- (53) ハンガリー商工会議所副会頭セーカーチから今岡への書簡一九二八年六月一日、今岡文庫
- (54) 大野守衛公使より幣原大臣への電文一九二九年七月二六日「外国見本市関係雑件、ブダペストの部」E.2.8.02-15. 外交史料館
- (55) *Cimlár, Budapesti Nemzetközi Vásár*. Budapest, 1929, pp.217-234.
- (56) 今岡が作成したブダペスト見本市報告書一九三〇年日付不詳、今岡文庫
- (57) Kiss Sándor : „A szagatott magyar-japán kereskedelmi kapcsolatok krónikája.” p.330 In: *Tanulmányok a magyar-japán kapcsolatok történetéből* 2009. Budapest

- (58) 今岡「ハンガリー滞在十年」日本週報一九五七年一月五日五八〜五九頁、*Képes Pesti Hírlap* 1927. nov. 24.
- (59) 今岡一九二八年の年賀状、今岡文庫
- (60) 高松宮夫妻の訪問については現地紙の報道、今岡の草稿(今岡文庫)及び大道社発行のツラン協会機関紙『大道』(一九三一年一号)の掲載記事による。
- (61) 百瀬宏「新興東欧諸国と日本」『戦間期の日本外交』一九八四年、一九二〜一九四頁
- (62) 日洪文化協定問題協議会における市川彦太郎の発言。「日洪文化連絡協議会関係」一九三七年一月一日 B1.0.0/J/H 外交史料館
- (63) 百瀬前掲書一九五〜一九六頁
- (64) Nagy Iván: *Nagy Kelet Ázsia*. Budapest. 1943. pp.1.21-1.25. 参照: Pakkert Géza: „A japán-magyar kultúregyezmény és annak eddigi kihatásai.” *Kültügyi Szemle* 1941. jan. pp.22-24.
- (65) 文化協定に関するホームマン・バーリント文化相の発言 *Új Magyarország* 1939. jun. 28.
- (66) 協議会の第一回会合へ送られたテレキの挨拶、日洪連絡協議会関係文書、今岡文庫
- (67) 松岡の挨拶文「日洪文化連絡協議会関係」I,1,10,0.2-20 外交史料館
- (68) Pakkert Géza: „A japán-magyar kultúregyezmény és annak eddigi kihatásai.” *Kültügyi Szemle* 1941. jan. sz. pp.22-23.
- (69) 文化協定の全般に関しては今岡文庫に草稿を含め史料が残っている。また以下の博士論文も文化協定を詳しく論じている。近藤正憲『戦間期における日洪文化交流の史的展開』一九九九年、千葉大学
- (70) 戦間期に流布した話であるが、医学的には認証されていない。しかしハンガリーの辞典にはこれについての記述が見られる。「蒙古斑は我が国では頻繁に見られる」(*Új Idők Lexikona* 17-18 köt. Budapest, 1940)、「ある人は「我

- が国ではあまり見られなく」 (*Az egészségügy ABC* Budapest, 1978)
- (71) 百瀬前掲書二〇一〜二〇二頁
- (72) Ghika György rádióbeszéde. 1940. nov. 26. MOL K63. Külügyminisztérium. Politikai iratok.115. csomó. 15. tétel: Japán. (ハンガリー国立公文書館)
- (73) 軍事的外交関係が発展し人的交流も大使館を通して増えている。詳細については以下を参照。 Wintemantel Péter-Sallay Gergely Pál.: „A magyar-japán diplomáciai kapcsolatok története, 1918-1945.” pp.141-148. In: *Tanulmányok a magyar-japán kapcsolatok történetéből* 2009. Budapest
- (74) *Ibid.* pp. 164-168.
- (75) 日洪文化協会会長三井高揚より外務大臣幣原喜重郎への補助金申請書一九四五年一〇月、今岡文庫
- (76) Wintemantel - Sallay *Ibid.* pp.161-164.
- (77) 古垣駐パリ日本大使より藤山大臣への電報など「ハンガリーとの国交回復申入れ関係」マイクロフィルム A-0147 外交資料館
- (78) Wintemantel Péter.: „Adatok a Japán-Magyar Baráti Társaság 1945-1975 közötti történetéhez.” pp.612-616. In: *Tanulmányok a magyar-japán kapcsolatok történetéből* 2009. Budapest
- (79) 藤田一郎から今岡への書簡一九六三年五月二四日、今岡文庫
- (80) 前掲註(2)小野氏との面談
- (81) マーチュシュ・シャーンドル氏との面談二〇一二年六月一三日
- (82) 小平功『日本・ハンガリー国交回復五〇年を顧みて』霞関会会報二〇〇九年一二月号